

XenosagaI・II - 第十話 灼熱 - Hitze - 上

アルベド：ほう、この天の車を引きずり出したか。思っていたよりも早いな。

おまえの中に眠る”鍵”――探すのでしょうか。

モモ：（やめて――モモの中へ――侵入[はい]って――こないで――

Jr.さん――ジギー――モモ――怖い――）

キルシュヴァッサー：――

アルベド：どうした？ ペシェだけかまってもらえるのが、羨ましいか？

キルシュヴァッサー：――

アルベド：ふん――ロクな反応もできんか。そこで黙ってみていろ、人形め。

キルシュヴァッサー：（私は――人形）

灼 - Hitze - 熱

ユリ・ミズラヒ：そんな――アレは消滅させたはず――

議員：あの忌々しい姿を、もう一度見ることになろうとはな。

ユリ・ミズラヒ：建造当初の目的は、そんな忌々しいものではありませんでした。

アレは――天の車は、この宇宙の真の姿を、我々のあるべき姿を見いだすために造られたはずでした。

それを、あの男が――

議員：そう、あの狂人によって引き起こされた事象がなんであったのか、思い起こしてみろ。

アレとゾハルが連動したら、どうなるかを――

だからこそ、百式プロトタイプの回収後、アビスへと落としたはずだ。それが何故ふたたび現れる！

ユリ・ミズラヒ：――わかりません。ですが、オリジナルゾハルはいまだ旧ミルチアにあります。

アレ単体ではなにも――

（そのはずーでなければ、我々[人類]はー）

デュランダル 

シオン：天の車ー？

ケイオス：ヨアキム・ミズラヒの研究プラントさ。

十四年前のミルチア紛争時に消滅させられたように擬装されてたけど、
ずっと、U-TIC 機関が隠匿していたのさー

シオン：あれが、ミズラヒ博士のーミルチアのー

Jr.：あの時のままだーなにも変わっちゃいないー

モモ：（助けてーJr. さんー）

Jr.：ー！ モモがーモモがあの中にいる！

ジギー：本当か！

メリィ：ー走査班！

百式：百式観測器プロトタイプ”モモ”の位置反応を捕捉しました。

相転移により出現した歪みーの中心です。

Jr.：くそったれ！ アルベドー奴だ、間違いない！

モモの声が聞こえたとき、同時に奴の感触もー

ガイナン：アルベドーか、やはり生きていたのか。

これまで感じていた不安の正体がわかったよ。彼女が何故あの場所にいるのかも。

ジギー：どういうことだ。

ガイナン：彼女ーモモは、

ヨアキム・ミズラヒが遺したある貴重な記録を持った特殊なレアリエンだからさ。

アルベドも U-TIC 機関もそれを求めている。ずっと以前からー

アレン：ーアルベドって誰なんです？

Jr.：俺が切り捨てた、俺自身の暗部さー

アレン：暗部ー

ジギー：Jr.、この艦を天の車に近づけてくれ。

アレン：ええっ！？

ジギー：最接近しなくともいい、小型艇を貸してもらえれば充分だ。

Jr.：待ちな！ あんたに言われなくてもわかってんだよ。

モモは俺が助け出す、――なにがあってもな！

ジギー：――やめておけ。

Jr.： んだとおっ！

ジギー： 近い者が危機に瀕すると人は理性を手放す。総じて、結末は悲惨なものだ。

俺は――そんな連中をたくさん見てきた。

Jr.： 俺がそいつらと一緒にだったのか。

ジギー： 違うのか？

そのアルベドという相手――そいつと対峙したとき、おまえは平静でいられるのか？

Jr.： ―――！

ジギー： そうだ――と言い切れるのならば、俺は何も言わん。だが、そうでないのなら――

Jr.： そうかい、たいしたもんだな。くぐってきた修羅場の数が違うってか？

教えてくれよ、そこまでドライに徹しきるコツをよ。

ジギー： ――頭の中を数字と戦略だけにしろ。大切な者たちの顔も、声も、思い浮かべるな。

たとえ非情と思ってもだ。激しすぎるノイズはすべてを滅ぼす。俺が――百年前に学んだことだ。

Jr.： 人間を数字に置き換えるようになったらおしまいだぜ。――サイボーグ。

ジギー： ―――――

シオン： ジギーさん――

ジギー： 言い過ぎてしまったか――

ケイオス： いいえ、Jr.ならちゃんとわかっていますよ。行きましょう、僕らも。

ジギー： ――そうだな。

ドックエリア

シオン： Jr.くん、どこに行ったのかな。

ジギー： 決まっている、モモを助けに行くなら――

ケイオス： 高速の小型船が必要だね。

エルザ 

Jr.：おせーぞ。

シオン：Jr. くんったら――

Jr.：モモを助けたいのは、俺だけじゃねえもんな。

シオン：ええ、その通りよ。

ジギー：Jr.、相手がモモをどうしようとおまえはおまえ自身を保て。そうすれば、彼女を助けられる。
――年寄りの助言だ。聞いておいた方がいい。

Jr.：――ああ、そうだな。そうするよ。

マッシューズ：よし、そうと決まったら、すぐ船出しますよ、ちび旦那！――行くぞ、トニー！

トニー：アイサー！

ひょおっ、いい加速！ ファウンデーションの連中、ばっちり直してくれたねえっ！

ハマー：トニー、まだ慣らしがすんでないパーツがたくさんあるんすよ！

トニー：それがどうしたあっ！ く～～燃える燃える燃えてくる！

マッシューズ：まったく、この馬鹿はよ！

ハマー：相変わらずっすよね～っと――ああっ、なんだこれ！

マッシューズ：どうした、はっきり言え！

ハマー：天の車から、高エネルギー反応っす！

トニー：直撃コースか！？

ハマー：いや、狙われてるのは――

連邦艦 

第 422 艦隊司令長官：――なんだ、この光は！

オペレーター：大出力エネルギー反応、回避不能――

第 422 艦隊司令長官：お、おのれ――っ

エルザ 

アレン： そんな、連邦艦隊が――

シオン： 一瞬で――

アルベド『――どうだい、ルベド。俺のオモチャ、喜んでもらえたか？』

Jr.： ――アルベド！

アルベド『いまのはこいつに残っていた、僅かなエネルギーを放出させたに過ぎないんだぜ。

本来の使い方とは違う、いわばオマケみたいなもんさ。』

Jr.： てめえっ、モモはどうした！

アルベド『もうわかっているんだろう？ ――ここにいるさ。俺のヒザの上にな。』

Jr.： モモになにをする気だ！ いや、なにをしてる！

アルベド『さあな。――自分の眼で、たしかめに来てみろよ。』

Jr.： ああ、行ってやらあっ！

アレン： ああっ、サブモニターを覗てください！

て、天の車が――グノーシスを吸収しています！

シオン： あの光――KOS-MOSの時と同じ――！？

アルベド『元々、この天の車は、ゾハルとひとつの装置だった。

ゾハルを求めるグノーシスは閉塞されたミルチアからわずかにこぼれ出るゾハルの波動に呼応する。

いまこいつは、グノーシスを媒介としてゾハルの波動を集め、

稼動に必要なエネルギーを溜めつつあるのさ。』

Jr.： なんだって、てめえがそんなことを知っている！

アルベド『――ペシェだよ。』

Jr.： モモのことか！？

アルベド『そうさ、その意識にリンクしたとき、こいつの使い方を教えてもらったのさ。――感謝してるよ、ひゃっははははは！

さて――あとどのくらいで再稼動するかな？ 5分か、それとも10分か――』

Jr.： ―――く！

アルベド『お、いま顔が青ざめたな、恐怖したな！

――そうだな、いっそのこと このままおまえたちを塩の柱にするってのも悪くはないな。

赤が白になるのか――くはははははは、傑作じゃないか！ あっははははは、赤が白だ！

あひゃっ、あひゃっ、あひゃっひゃっあはははははははははひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃっ！』

Jr.： 馬鹿にしゃがって――っ！

アルベド『うひゃっひひひ――さあて、どうしようか――ん～～～～～

よおし、決めたぞ、次の一射を――』

アレン：天の車が姿勢制御を始めました！

ハマー：デュランダルから入電！ 射線軸が第二ミルチアの首都に向いているそうっす！

シオン：――なんですか！

アルベド『その通り、百式に探知させたのか？ さすが、優秀だなあ。』

Jr.：そんなことは絶対させねえ！

いいか、アルベド！ そこを動くんじゃねえぞ、今度こそ決着をつけてやる。

アルベド『はあっははは、よせよ、らしくもない。他人のことなんて、本当はどうだっていいんだろ。』

Jr.：んだと！

アルベド『まあ、いいさ。止められるものなら、止めてみろよ。ふははははははっ！

待ってるぞ――ふははははははははははひゃっははははははははははははははひゃ――はっはっはっはっはっはっは！』

Jr.：――畜生。

ハマー：あ、今度はファウンデーションから通信っす！

ガイナン『――こいらでも傍受した。やはり、ヤツだったか。』

Jr.：ああ、意外じゃねえけどな。

ガイナン『――因縁、か。

Jr.、いま接触小委員会からU.M.N.通信が入っている。』

Jr.：こっちは取り込み中だぜ。――まさか、ユリ・ミズラヒか！？

ガイナン『ああ、中継する。』

ユリ・ミズラヒ『お久しぶりです、ルベド。いえ、ガイナン・クーカイ・Jr.――でしたね。』

Jr.：ああ、そう呼んでもらえる方が嬉しい。変わり――なさそうだな。

ユリ・ミズラヒ『あなたほどではありません。』

Jr.：――違うない。

ユリ・ミズラヒ『いま、あなた方は天の車へ向かっているのですね。』

Jr.：ああ。

ユリ・ミズラヒ『あれは建造半ばにして放棄された巨大な実験プラントです。

内部には閉鎖前の作業坑が縦横に走っており、それらが集まる中心部に動力炉があります。』

シオン：――！

そこを破壊すれば、第二ミルチアへの攻撃を止められるのね！

ユリ・ミズラヒ：（！ 彼女はジン・ウヅキ大尉の――あなたまで、あの子の救出に加わっているなんて――

——これも因縁、ですね)

『ええ、それで天の車の全機能が停止します。

最短ルートデータを、いまから転送します。』

ハマー：来た来たっす！

ユリ・ミズラヒ『いま現在、直接動けるのはあなた方だけ。

連邦政府の人間として、また一個人として、お願いします。

あの忌まわしい機械を破壊してください。徹底的に——』

Jr.：ああ、まかせてくれ。それから、モモを連れ帰ってやるよ。

ユリ・ミズラヒ『—————お願いします。』

Jr.：悪いな——身内の問題に巻き込んで——

シオン：気にしないで、故郷の危機だもの。いいよね、アレンくん。

アレン：——どうせ、嫌だっていっても行っちゃうに決まってるんだし。ちゃんと社の許可は取っておきました。

シオン：さっすが、アレンくん。

アレン：こうなったらお供します、地獄の底まで——！

マシューズ：縁起でもねえこと言ってんじゃねえ！ ——で、侵入するには問題ないんだな。

ハマー：データによれば、外殻の防空網はないに等しいっすね。もともとは研究プラントっすから。

でも、内部ではセキュリティが働いてるんじゃないすかねえ。ガードマシンくらいは覚悟っすね。

マシューズ：突入までが俺たちの仕事、後は頼んますぜ、ちび旦那。

Jr.：ああ、わかってる。

マシューズ：よし、遠慮なく行けっ、トニー！

トニー：アイサーッ！

——って、手当てちゃんと出るんだろうなあ。

ハマー：船長、天の車の側面部に接舷できそうなブロックを確認したっす！

マシューズ：よし、そこにつけろ。——トニー、用心しろよ。

トニー：了解、これより側面部に接舷す——

シオン：待って！

トニー：ああ？

シオン：トニーさん、頂上部を——

トニー：な——上に行けってのか！？

シオン：お願い、旋回してくれるだけでいいの。

トニー：わかった、そんな眼で頼まれちゃな。一回だけだぜ、なにが起こるかわかんねえからな！

シオン：ありがとう――

ジギー：あれが、天の車の頭頂部――

Jr.：ああ、あそこに見えるのがネピリムの歌声の発生装置だ。

シオン：（発生装置？ でも――間違いない、ここは――母さんの病院の窓から見えた、あの場所――）

トニー：もういいか、シオン！

シオン：ありがとう、もう行って！

トニー：よっしゃ、突っ込むぜ！

マシューズ：みんな、手近なモンにつかまってる！

シオン：う――ん――

アレン：大丈夫ですか、主任――

シオン：うん、突入――成功したのね。

ハマー：どっかのバカのせいで、いろいろいかれちゃったっすけどね――

トニー：んだとおっ！

マシューズ：いい加減にしろ！

おい、シオン姉ちゃん。さっさとモモ嬢ちゃんを助けに行っちゃってやってくれ。

アレン：お願いします。僕はここで、エルザの修理を手伝ってます。

――本当は、ご一緒したいんですけど。

シオン：ううん、帰り道を確保してくれる人がいないと、困るもの。当てにしてるね、アレンくん。

アレン：は、はい――！

Jr.：よし、行くか。

天の車 🚗

あれは――！

Jr.：――モモ！

モモ、モモ――！

モモ：――――

Jr.：モモ、無事だったか！

モモ：――――

Jr.：モモ――

ジギー：いったい、どうしたのだ。

Jr.：まさか――奴に――ちっくしょう、あの野郎！ モモの意識を――！

絶対赦せねえっ、待ってろ、俺が取り戻してきてやる！

シオン：Jr. くん、モモちゃんになにがあったの？

Jr.：アルベドの野郎、精神リンクをリバーサさせやがった――

ジギー：精神リンクのリバーサ――

Jr.：俺とガイナンの念話の逆パターンさ。

相手の意識を、無理矢理自分側に引っ張り込むことによって、深層意識の奥まで侵入し、

必要な記憶を引きずり出すことができる――

シオン：そんな――それじゃ、モモちゃんの意識は――

Jr.：――ああ。やっぱみんなは戻っててくれ、こっから先は、俺だけでいい。

ケイオス：待って、君一人で行くなんて無茶だ。

Jr.：悪い、これは――”俺たち”の問題なんだ。だからさ――

ケイオス：だけど――

Jr.：モモ――おまえも来るってのか？

モモ：――――

シオン：――私も行くわ。

Jr.：シオン――

シオン：ミルチアが滅んだのも、グノーシスが出現したのも、この天の車が原因なのよね――

もしここが、私が知っている”あの場所”と関係があるのなら、それは――私の問題でもあるのよ――

『資材搬入通路の通行制限を解除しま――』

シオン：壊れているみたいね――配線を繋げば何とかかなりそうだわ――

『資材搬入通路の通行制限を解除しました。通行可能です。』

43 層

【 戦闘 VS ドッペルフォーゲル 】

—

『ロスト・エルサレム——遙か数千年前に失われた、人類の故郷。地球。
現在はその場所がどこにあったのかさえ判らなくなっている。』

—

アルベド： よお、意外と遅かったじゃないか。こっちは再会を待ちこがれてたのにさあ。

Jr.： アルベド、てめえ——！

アルベド： 生きていたのか——なんて、陳腐な台詞は言わないでくれよ。

その言葉は俺にとって、なんの意味もなさない。

時に——この娘には、もう教えてやったのか？

Jr.： モモ！？ なんでそこに——

ぐっ、首が——

アルベド： ふふっはっはは——

モモ： あなたの中の、私をちょうだい——

Jr.： モーモ——？

シオン： モモちゃん！？

ジギー： いや、違う！ こいつは——

アルベド： 肉に依存せぬ身軽な魂——汚れなき思念に定型などない。

あるのは現実[ル・レエル]への憧憬———なあ、そうだろう？

——キルシュヴァッサーよ。

Jr.： や、やめろお——っ！

キルシュヴァッサー： ————！

シオン： 大丈夫——！？

キルシュヴァッサー： （あなた——は——）

アルベド： 見たか、ペシエ——これがこいつの本性だ。

生へとしがみつく意識が体現する哀れな姿だ。見苦しいよなあ——アルベド。

モモ： （Jr.——さん——）

（ああ――）

Jr.： 野郎っ！

アルベド： どうした、ルベド。俺を撃つのか？

違うだろう、俺に対してなにをすればいいのか、よく思い出せよ、ルベド。

それとも、安穏と時を過ごしたせいで忘れたのか――

Jr.： くっ――てめえのゴタクはどーでもいいんだよ、モモを返せ！

アルベド： いやだね、こいつの一部を受け取り、進ませてもらう。そして、思い出させてやろう。

おまえが何者なのかをな――！

Jr.： うるせえ！ ウ・ドゥにやすやすと汚染されて、暴走した奴に言えたセリフか！

アルベド： 汚染？ 違うな、進化だよ。あの時、俺は自らの力の一端を知った。

俺の中に流れ込んできた波動は、いまや俺自身。

おまえたちのような、半端な反存在とは違う。俺こそ、完全なる意識の奔流なのだ！

モモ： （ああああああああああっ！）

Jr.： や、やめろ――！

アルベド： いい感触だ――おまえも試したいんじゃないのか？

Jr.： モモッ！

アルベド： ふっはっはっはっは、なんとも素敵な痛みじゃないか――己の存在を知覚するには痛みは不可欠だからなあ。

ジギー： 馬鹿な、あれはナノマシン――か？

シオン： 違う、ナノマシンにあれほどの再生スピードはないし、

それに頭部を再生できる種類[タイプ]なんて、実験室レベルでも実現されてないわ。

ケイオス： U.R.T.V. だよ、彼は。Jr. と同じ――

シオン： えっ？

ケイオス： 彼らは――ウ・ドゥを消し去るためだけに、存在するんだ――

シオン： ウ・ドゥを――

アルベド： ルベド、まだ思い出せないのか。いや、違うな――恐怖――？ そうか、怖いんだな。

そうだろう、当然か――おまえにとっては、おまえ自身が全てだものなあ、ルベド。

そんな酷薄なおまえに縋るしかなかった、この娘も哀れだよなあ。

Jr.： （あれは――モモにやったお守り！）

アルベド： あと一層――この深層領域を超えれば、この娘の全てが俺の内[なか]へ流れ込んできく。

それがなにを意味するのか、わかってるだろう、ルベド。さあ、どこまで耐えられるかな。

モモ：（あああああああああああっ！）

Jr.：やめろおおおおおっ！

ヨアキム・ミズラヒ：私はここまでだーこれから起こることは、誰にも止められない。

私には、そのときを延ばすことしかできない。だからせめて、おまえに託そうー
時は交差する。いずれおまえは、彼女たちと出逢う。そのためのー

アルベド：（あれが、ヨアキム・ミズラヒかー見せてもらうぞ、貴様がペシェに託したすべてをー）
（これが、Y資料かー）

???：私はあなたのために、存在するのではありませんー

アルベド：（くだらん防壁だ、こんなものー）
（なー貴様はー！）

アルベド：ぐううううっ！

Jr.：モモ！

シオン：モモちゃん、大丈夫ー！

キルシュヴァッサー：（シオンー）

シオン：え？

アルベド：くっくくくく、その女、貴様ー

シオン：えー？

アルベド：くくくくくく、そうかーそういうことか、ヨアキム・ミズラヒめー
大仰なトラップを仕掛けやがってーだが、くくく、面白い、面白いぞ！

Jr.：なにを言ってやがる、アルベド！

アルベド：ーそうだな、いまはールベド、いまはおまえとの一時を楽しむとしよう。
さあ、来いよー俺たちの時間はこれからだぜ。

Jr.：アルベドオオオオッ！！

アルベド：そうだ、ルベドオッ！

いいぞ、ルベド、だいぶ以前のおまえに近づいてきたじゃないか！ だが、まだ足りないなー
あのおまえは、こんなもんじゃなかったろう、ええ！

Jr.：ア、アルベドー調子にー乗るなあっ！

ガイナン：！ーJr.！！

メリィ： ちび様——あかん！

Jr.： ぬおおおおおっ！

アルベド： どうしたルベド、おまえという存在はその程度だったのか？ 見せてくれよ、おまえの全てを！

ケイオス： ダメだ、Jr.！ これ以上挑発に乗っちゃ！ でないと、君は——

モモ： う——ん——

シオン： モモちゃん、気がついたの？

モモ： シオンさん——

あっ、Jr.さん！

シオン： モモちゃん、大丈夫——！

キルシュヴァッサー： —————

パパは——いつもあなただけを見ていた。だから——私たち、みんな——

あなたに——なり——たかった———

モモ： ——そんなことない！ 私たち、みんな一緒のはず——なのに。

キルシュヴァッサー： （そんなはず——ない 現に——シオンだって——）

アルベド： さあ、ルベド！ あと少しだ、あと少しでおまえの望みが叶うぞ！

来い来い来い来いっ！！

Jr.： うおおおおおっ！

ケイオス： Jr.——！

モモ： Jr.さんっ！

シオン： モモちゃん！

Jr.： モモ——

モモ： あなたは私からたくさんのものを奪っていきました。でも——私も——

私の中に流れ込んできた、あなたの一部をもらったから、だから——

アルベド： だから——？ ふっははははっは、だからそんなことをしているのか？

モモ： なぜ、みんなをいじめるの？ モモの妹たちは、あなたの中にあるなにかを好きだった。

どんなひどい目に遭っても、まだ信じていた。その想いを、その心を、踏みにじらないで！

アルベド： ふわっははははは！ 踏みにじる？ 妹たちだと？

足元を見てみろ、その屍を養分に咲いた花は誰なんだ？ そう——おまえさ、ペシェ。

すべてはミズラヒ——おまえの大事なパパが望んだ通りなんだよ。

モモ： パパが———？

アルベド： そうさ、なあ、ルベド。

Jr.： て、てめえ——それ以上言ってみろ、ぜってえ、ゆ————

シオン： 赦せないっ！ 彼女たちはあなたの玩具じゃないわ、みんな個々の意志をもった生命なのよ。

それを——

???： お為ごかしはヘドが出るっつたろう。

シオン： ——え？

アルベド： ——新顔か。

???： 遊んでる暇があったら、さっさと役割を果たせ。いまのおまえの目的はこいつらじゃなかろう。

アルベド： ——ふん、奴に言っておけ。アレはおれのものだとな。

Jr.： 待てよっ！

???： どこへ行こうってんだ？ なあ、あいつを暫く自由にさせてやってくれないか。

それまでこの俺が、おまえたちの相手をしてやるからよお。

Jr.： んだとお——

???： （おい、追っていかなくていいのか？ 置き去りにされちまうぞ。）

キルシュヴァッサー： ————！

???： （くくくく、お前のことなら、よおくわかってるさ——

なんせお前に殺された俺だからなあ。そうだろう？

——お前が百式としての義務を果たさず、あの野郎についていったせいで、ヴォークリンデは沈んだ）

キルシュヴァッサー： ————

???： （大勢死んだ。俺だって死んだ。痛かったぜえ、つらかったぜ）

キルシュヴァッサー： ——あ、——あああ。

???： （行けよ、お前の生きる場所はもうヤツの隣しかねえんだからよ）

キルシュヴァッサー： ————

モモ： キルシュヴァッサー！

シオン： なにを話してたの？ 誰なの——あなた？

???： 誰え？ 誰だっていいだろう。それとも、言葉が欲しいのか。

言葉による定義なんてものは、所詮は自身を欺くための方便。真実の前では無意味なものさ。

要は知覚の仕方、立つ場所がほんのわずかなで、生も死も消失する——

シオン： え——

（この声、どこかで——）

???：わからねえか、ならよ、おまえもこの俺と――

Jr.：どけーよ――

???：んん？

Jr.：どけつつってんだよっ！

???：いい感じだ、小僧。力づくでどこしてみるんだな。

おまえら U.R.T.V. にとっちゃ造作もなかろう。

【 戦闘 VS アインリューゲル 】

???：やるじゃねえか。だが、無駄だなあ。

おまえらと俺とでは、この世界に存在する法則が違うからな。なあ、そうだろう、大将――

ケイオス：――――――

???：さて、と――奴はもう行ったか。

そろそろ俺も退散させてもらうとするぜ。なにかと忙しい身分なんでな。

シオン：待って！ あなたの目的は何なの、なぜ私たちの前に――？

???：知りたいか？ なら来いよ、あの時、あの場所へ、わかるよな――

シオン：え――――

（ネピリムと同じ言葉――？）

???：楽しみにしてるぜ、シオン。

シオン：KOS-MOS！

KOS-MOS：反応、消失しました。半径 100m 圏内には存在しないものと思われます。

シオン：そう――

モモちゃん、大丈夫だった――？

モモ：――――――

シオン：どうしたの？

Jr.：Y 資料のことなら、気にする必要なんてねえぜ。

モモ：！ Jr. さん――

Jr.：みんな、おまえを助けにここまで来たんだ。資料を回収に来たんじゃねえ。

ジギー：その通りだ。

モモ： Jr. さん、ジギー――

Jr.： これ、拾ったいた。

モモ： あ、お守り！

これがあったから、帰ってこられたような気がします――

Jr.： そっか――持っててくれよな、これからも。

モモ： はい！

シオン： モモちゃん、 Jr. くん――

ケイオス： でもまだ、終わっちゃいないね。

シオン： ええ、第二ミルチアへの攻撃をやめさせないと。

KOS-MOS、動力炉への道はわかる？

KOS-MOS： はい、推定可能です。

シオン： じゃあ、行きましょう！

Jr.： おう！